



TITLE:

# 日印貿易の再検討

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

---

CITATION:

谷口, 吉彦. 日印貿易の再検討. 經濟論叢 1936, 43(2): 208-225

ISSUE DATE:

1936-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130836>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第 二 號      第 四 十 三 卷

昭和十一年八月一日發行

## 論 叢

地方税としての住居税……………法學博士神戸正雄  
資金需要供給の金融緩慢逼迫に於ける中立性……………經濟學博士小島昌太郎

## 時 論

革新原理としての「民有國用」に就いて……………經濟學博士石川興二  
日印貿易の再檢討……………經濟學博士谷口吉彦

## 研 究

フイヒテに於ける國民の福祉……………經濟學士出口勇藏

## 講 演

近時に於ける經濟觀と政策觀の變化に就て……………法學博士河田嗣郎

## 說 苑

ドイツ商業航空の新展開……………法學士吉川貫二  
ルーテルの商業及利子論……………經濟學士澤崎堅造  
土地問題と産業組合……………經濟學博士八木芳之助

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

# 日印貿易の再検討

谷 口 吉 彦

## 目次

- 一、日印貿易の發展  
二、日印貿易の内容  
三、日印貿易の相互重要  
四、主要貿易品の重要性  
五、協定成立後の日印貿易

## 一、日印貿易の發展

昭和九年初頭より實施されつゝある日印協定が、貿易政策の轉換上いかなる意義を有するかに就ては、すでに論述した所である。然るにこの日印協定は來年三月末日をもつて満期となるにつき、之に先だつ六ヶ月以前において、之が繼續または改訂の協議を要し、再度の日印會商は今まさに開かれんとしつゝある。現行の日印協定を批判し、之が改訂を論議するに先だち、吾々はまづ日印貿易に關する現實の事實を検討し、之が分析を試みねばならぬ。本論の目的は茲にある。

いま明治十年（一八七七）より昭和十年（一九三五）に至る五十九年間の日印貿易について、その發展の跡を顧みる時は、輸出入ともに顯著な膨脹をなし來り、最初は百萬圓にも足らぬ貿易が、最近では年々五億圓以上に達してゐる。五十九年間の累計は、輸出三十四億圓、輸入七十二億圓に達して、二倍以上の輸入をなしてゐる。最近十年間でも輸出十八億圓に對し輸入二十四億圓を

超えてゐる。即ち日印貿易は全體として著しき片貿易であつて、吾國は入超關係にある。

この入超關係は日印貿易を一貫する傾向であつて、第一表に示さるゝ如く、之に反するのは五十九年中例外的の四年に過ぎない。即ち明治十・十一年と昭和七・八年これである。その他の年は總て輸入超過である。併しながら等しく輸入超過でもその内容には相違がある。絶對額では最初は百萬圓程度の入超が、歐洲大戰後には年々二億乃至四億圓の入超となり、最近では減退して數千萬圓となつてゐる。輸入に對する輸出の比率も、最初の明治年間には極めて低率の一割乃至二割に過ぎなかつたが、世界戦争前後より三、四割となり、昭和年代に入つては五、六割となり、遂に最近の躍進時代に入つては出超に轉することゝなつた。その結果として日印協定の成立となり、この協定の下にある昭和九年以後は、八割乃至九割の比率を示す入超である。即ち之によつて知りうることは、日印貿易は終始一貫して入超ではあるが、併しその程度は過去五十九年間に次第に減退し來り、最近では之を自然に放任せば却つて出超を示すべきであるが、貿易統制の結果として、可なり均衡に近づいてはゐるが、併し尙ほ依然として吾國の入超を續けつゝある。この事實は日印協定の改訂に當つてもまた考慮すべき要件である。

然らば斯くの如き入超傾向の變化は何故に惹きおこされたか、第一表によりて明なる如く、之は一般には輸入の減退によるよりも、寧ろ主として輸出の進出によるものである。即ち輸入は大戦直後より今日まで大體に三億圓程度を維持して變化なきに對し、輸出は當時の一億圓程度から

第一表 日印貿易の發展

年次	輸 出	輸 入	差 額	輸入を 100と する輸 出	年次	輸 出	輸 入	差 額	輸入を 100と する輸 出
明治10	千円 332	千円 190	千円 + 142	% 174.7	40	千円 13038	千円 74593	千円 - 61505	% 17.5
11	2455	819	+ 1636	299.8	41	13631	49328	- 35697	27.6
12	216	1591	- 1375	13.6	42	14425	65157	- 50732	20.6
13	123	1750	- 1627	7.0	43	18712	106361	- 87649	17.6
14	126	2212	- 2086	5.7	44	20316	99695	- 79379	20.4
15	362	2306	- 1944	15.7	大正 1	23648	134741	- 111093	17.5
16	412	2455	- 2043	16.8	2	29873	173173	- 143300	17.3
17	536	2350	- 1814	22.8	3	26048	160324	- 134276	16.2
18	493	3398	- 2905	14.5	4	42202	147585	- 105383	28.6
19	649	3561	- 2912	18.5	5	71617	179464	- 107847	39.9
20	453	5291	- 4838	8.6	6	101364	223941	- 122577	45.3
21	457	7689	- 7232	5.9	7	202522	268185	- 65663	75.5
22	1341	7333	- 5992	18.3	8	116878	319477	- 202599	36.6
23	590	8910	- 3010	6.6	9	192249	394930	- 202681	48.7
24	987	5614	- 4627	17.6	10	84503	210365	- 125862	40.2
25	1422	7662	- 6240	18.6	11	97203	254088	- 156885	38.3
26	2471	8679	- 6208	28.5	12	99619	305718	- 206099	32.6
27	3688	10560	- 6872	34.7	13	135373	387791	- 252418	34.9
28	4359	12001	- 7642	36.3	14	173413	573563	- 400150	30.2
29	4537	22517	- 17980	20.1	昭和 1	155951	391136	- 235185	39.7
30	5563	29775	- 24212	18.7	2	167580	270592	- 103012	61.9
31	6134	40764	- 34630	15.0	3	146006	285467	- 139461	51.1
32	6062	43883	- 37821	13.8	4	198056	288119	- 90063	68.7
33	8704	23516	- 14812	37.0	5	129262	180424	- 51162	71.7
34	9657	42779	- 33122	22.6	6	110367	133165	- 22798	82.9
35	5067	49802	- 44735	10.3	7	192491	116865	+ 75626	164.7
36	8086	69894	- 61808	11.6	8	205154	204737	+ 417	100.2
37	9404	68011	- 58607	13.8	9	238220	289671	- 51451	82.2
38	7997	90226	- 82229	8.8	10	275637	305646	- 30009	90.2
39	10351	60315	- 49964	17.2	總計 最近 十年計	3398442	7229654	- 3831212	47.0
						1818724	2465822	- 647098	73.8

日印貿易の再検討

第四十三卷

二一〇

第二號

五八

最近の二億圓以上に倍加せるためである。この傾向より見る時は、日印貿易は輸入停頓・輸出増進の自然的傾向にある。日印協定はこの傾向に對する制動的の意味を有するものである。

## 二、日印貿易の内容

然らば日印間の貿易は如何なる内容より成るか、いま昭和元年より十年に至る最近十年間の日

第 二 表 英領印度よりの主要輸入品

	棉 花	鐵類	麻類其他植物纖維	鉛	鑛	革類	豆類
昭和	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
1	327 520	9 634	3 735	2 978	—	2 503	1 925
2	202 281	11 040	3 207	992	458	2 334	2 084
3	232 266	12 929	3 888	545	56	2 282	3 530
4	231 108	16 949	4 848	1 025	8	2 541	2 454
5	147 688	7 666	2 968	1 279	418	1 965	1 336
6	113 262	3 626	1 954	1 131	108	1 761	811
7	91 746	3 027	3 669	1 866	1 107	1 483	1 300
8	168 796	14 654	5 400	2 011	1 612	1 956	1 434
9	252 434	12 053	4 883	3 048	2 355	2 762	1 370
10	259 036	17 587	4 654	4 634	3 636	2 518	2 294
	生ゴム	米及穀	採油用原料	油槽	皮類	計	對印輸入率
昭和	千円	千円	千円	千円	千円	千円	%
1	10 869	15 795	613	3 434	123	379 129	96.9
2	11 600	20 366	959	2 451	54	257 826	95.3
3	6 578	2 046	3 208	3 987	77	271 392	95.1
4	8 791	3	2 987	2 108	74	272 896	97.3
5	3 756	—	754	809	11	168 651	93.5
6	343	—	582	789	7	124 374	93.4
7	293	282	781	2 048	97	107 704	92.2
8	364	—	299	1 184	284	197 994	96.7
9	478	327	78	1 032	232	281 052	97.0
10	187	200	81	822	462	296 111	96.9

印貿易につき、先づ吾國への主要輸入品を見るに第二表の如くである。

輸入全體としては前の第一表に示さるゝ加く、十年前の約四億圓から一時激減して約一億圓となり、最近は恢復して約三億圓となつてゐる。その内容は第二表によりて明らかなる如く、棉花をもつて八割五分内外を占める。之に次ぐ鐵類は僅かに五分程度であり、第三位の麻類其他植物纖維は一分程度である。その他に鉛・鑛・革類以下多數の商品を包含するが、その金額は極めて僅少である。第二表所掲の十二商品にて對印輸出額の九割五分程度を占める。要するに對印輸入は著しく集中的であつて、唯一商品にて八割五分、二商品にて九割、十二商品にて九割五分を占める状態である。

次に吾國から印度への輸前品について同様に主要商品につき第三表を作成する。

對印輸出全體としては前の第一表に示さるゝ如く、十年前の一億五千萬圓程度から、中間の不況期には多少減退したが、最近では躍進して三億圓程度に達してゐる。その内容は第三表によりて明らかなる如く、綿織物は約三割、絹人絹織物は二割弱、綿絲は一割弱を占め、以下メリヤス製品・硝子製品・陶磁器・鐵製品等々、極めて多種類にわたり、第十表に掲出する十八商品にて最近七割五分を占めてゐる。即ち對印輸出は輸入に比し著しく分散的である。即ち主要な一、二の商店についても、掲出せる諸商品についても、輸出は遙かに低率である。のみならずこの分散性は、この十年間に於て次第に増進しつゝある。即ち所掲十八商品にて十年前には九割を占めた

第三表 英領印度への主要輸出品

	綿織物	絹人絹織物	綿絲	メリヤス製品	硝子製品	陶磁器	鐵製品	眞鍮	毛織物	機械及部分品
昭和	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
1	70 346	11 985	28 086	8 878	3 515	2 933	2 351	2 337	1 706	276
2	85 781	15 845	20 040	8 449	3 607	2 525	2 232	2 352	1 199	349
3	70 185	17 073	9 181	10 641	3 834	2 456	2 498	2 683	153	484
4	109 138	24 717	13 448	9 928	4 035	2 558	2 304	2 515	375	581
5	61 216	16 781	6 575	7 948	2 888	1 867	1 712	1 858	188	728
6	49 866	21 524	5 592	3 901	2 239	1 391	1 762	1 150	63	470
7	80 653	32 956	14 343	6 698	4 106	3 463	3 322	2 989	591	900
8	71 432	32 912	7 605	9 628	5 506	3 965	5 151	3 885	1 647	2 104
9	66 813	42 508	11 111	8 349	5 473	3 200	4 984	4 919	8 219	2 272
10	85 180	40 528	20 093	7 509	6 228	3 529	5 465	5 505	4 920	3 070
	身邊粧飾用品	人絹絲	玩具	生絲	鐵	木材	樟腦	帽子	計	對印輸出に對する比率
昭和	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円	%
1	2 285	—	993	—	—	3 646	1 432	476	141 245	90.6
2	2 451	—	997	—	3	2 766	1 169	628	150 393	89.7
3	2 813	—	1 277	—	6	3 072	1 448	634	128 438	88.0
4	3 054	—	1 413	—	5	3 329	1 748	628	179 826	90.8
5	1 695	—	1 069	—	14	2 518	685	506	108 248	83.8
6	1 142	—	711	—	21	1 762	616	497	92 707	84.0
7	2 070	—	1 465	—	251	1 529	972	898	157 306	81.7
8	2 431	1 354	3 809	273	819	1 884	1 288	1 181	156 874	76.4
9	3 266	8 366	3 063	1 789	1 378	1 060	1 228	1 586	179 584	75.4
10	3 764	7 592	2 750	5 533	3 126	1 199	1 632	1 338	208 959	75.8



ものが、最近では七割五分に減退してゐるからである。要するに輸入は殆んど棉花に集中されるに反し、輸出は綿織物以下多數の商品に分散されてゐるのが著しき特徴である。

### 三、日印貿易の相互重要

吾國にとつての對印貿易の重要と、印度にとつての對日貿易の重要とは、種々なる意味において検討することが出来る。第一に、吾國における對印貿易は、全體として吾國貿易上如何なる地位を占めるかを見るために第四表を作成する。之について先づ吾國の對印輸出の總輸出に對する比率を見るに、十年前の七・八%から最近の一〇・一一%内外に及んでゐる。然るに對印輸入の比率は、十年前の一六%から最近の一・二%に減退してゐる。即ち吾國の貿易における對印貿易は輸出においては約一割、輸入においては一割二分を占めるに過ぎず、且つ輸出は増進傾向、輸入は減退傾向にあるといふことが出来る。

第四表 日本における對印貿易の地位

年次	英領印度へ輸出	輸出總額	輸出總額に對する對印輸出の%	英領印度より輸入	輸入總額	輸入總額に對する對印輸入の%
一九二六年	一五、九五二 <small>千円</small>	二、四、七七七 <small>千円</small>	七・三	三九、一三六 <small>千円</small>	二、三、七、四四四 <small>千円</small>	二・五
一九二七年	一五、五八〇	一、九、九二七	八・四	二七、〇五九	二、二、九、一五五	二・四
一九二八年	一四、〇〇六	一、九、七、九五五	七・四	二五、四六七	二、一、六、三三四	二・〇〇
一九二九年	一八、〇五六	二、一、八、六六八	九・三	二八、二一九	二、二、六、一四〇	三・〇〇

一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
一九、六三二	二〇、三六七	一九三、四九一	二〇五、一五四	二二八、三三〇	二五、六六七
一、四六九、八五三	一、二四六、九八一	一、四〇九、九九一	一、八六一、〇四五	二、一七一、九三四	二、四九六、〇七三
八・六	九・三	三・五	二・三	一・七	二・三
一八〇、四三四	一三三、一六五	一六六、八六五	二〇四、七三七	二八九、六七一	三〇五、六四六
一、五四六、〇七〇	一、三三五、六七三	一、四三一、四六一	一、九一七、二一九	二、二八三、六〇一	二、四七三、三三六
二・七	一〇・六	八・六	一〇・六	二・六	二・六

第五表 印度における對日貿易の地位<sup>1)</sup>

年次	日本へ輸出	輸出總額	輸出總額に對する對日輸出の%	日本より輸入	輸入總額	輸入總額に對する對日輸入の%
一九二九—三〇年	三三、六七三	三、一〇八、〇六六	一〇・四	三、三三六、八五五	二、四〇七、五九九	九・八
一九三〇—三一年	二七、三九八	二、二〇四、九三六	一〇・八	一、四五一、二二〇	一、六四七、九三七	八・八
一九三一—三二年	一九、四八八	一、五八八、八六六	八・九	一、三三三、九七七	一、六三三、七二四	一〇・六
一九三二—三三年	一九、五五〇	一、三三三、七二二	一〇・六	二、〇四七、七六六	一、三三三、八四三	一五・五
一九三三—三四年	二六、一二二	一、四六三、一四九	八・六	一、六三三、五五一	一、一五五、五七〇	一四・二
一九三四—三五年	二四、四三二	一、五二二、四一九	一六・〇	二、〇七、九九四	一、三三三、五九九	一三・五
一九三五—三六年	二八、六六七	一、六〇四、八七五	一三・六	二、八三三、五五五	一、三三三、九一一	一六・三

次に印度における對日貿易の地位を見るに、第五表に示さるゝ如く、輸出において十年前には一〇%、最近では一三%を占め、輸入においては十年前に九%、今日では一六%を占めてゐる。而して輸出入ともに次第に遞増傾向にある。即ち印度における吾國商品の地位は、輸出入ともに一割五分程度であり、且つ増進的である。

1) 日印會商準備委員會、日印貿易參考資料に據り算出す。

右の二つの結果を綜合して言ひうることは、吾國における印度の重要性よりも、印度における吾國の重要性の方が稍々大なる點にある。たゞ之は日印貿易全體としての價額關係より見たに過ぎない。主要商品および商品種類については別に考察せねばならぬ。

因みに參考のため英領印度の貿易を主要相手國別に示せば第六表の如くなる。

第六表 英領印度の貿易相手國

相手國	印 度 へ の 輸 入				印 度 よ り の 輸 出			
	一九三三 —一九三四年	一九三四 —一九三五年	一九三五 —一九三六年	以上三ヶ年 平均	一九三三 —一九三四年	一九三四 —一九三五年	一九三五 —一九三六年	以上三ヶ年 平均
英本國	千圓比 四七三・〇八三・三%	千圓比 四七五・二七三・四%	千圓比 四九七・九三三・〇%	千圓比 四八二・七三三・六%	千圓比 四七五・八九四・六%	千圓比 四七四・八二・〇%	千圓比 五二二・七五三・六%	千圓比 五一七・〇四二・二%
英帝國	六八一・四七六・六	六八三・七三三・三	七三三・五七九・七	六九二・二六〇・九	五七七・〇五二・〇	六三三・四九四・四	六五四・九三三・八	六三八・四六四・四
日 本	二六二・二八・六	二四一・四三二・六〇	二八六・六七三・六	二五九・四七二・七	二六三・五二四・三	二〇七・九九二・五七	二八三・五五・六・三	一九六・六三二・五・四
北 米	一四〇・七五・九・六	二二六・七四四・八・五	一六〇・七〇二・〇・〇	一四三・四〇〇・九・四	七六二・二六・二	八三・九七三・六・四	八九四・〇三・六・七	八二七・九六・四
合衆國	九三六・四六・七	六九八・五三・四・六	八六・九〇七・五・四	八五〇・四二・八・五	八八五・二七七・一	一〇二・四八・七・七	一三三・五七・九・三	一〇四・五五・八・三
獨逸	九三六・四六・七	六九八・五三・四・六	八六・九〇七・五・四	八五〇・四二・八・五	八八五・二七七・一	一〇二・四八・七・七	一三三・五七・九・三	一〇四・五五・八・三
計 (英本國を除く)	二〇四・六八七・五・二	二二二・七五二・三・三	二二八・八七三・四・七	二二二・〇九三・一〇・五	九二・二四六・三・三	一〇四・六七九・三・三	一〇八・八二〇・八・二	一〇一・〇四七・三・三

第六表について印度の貿易先を見るに、最近三ヶ年平均において英本國は輸出の三一・六%、輸入の四二・一%を占めて支配的である。たゞ相對的にも絶對的にも輸出よりは輸入が大である。即ち印度の入超關係にある。次に英本國に屬領を加へたる英帝國は、輸出において四五・九%、輸

入において四九・四%を占める。即ち印度の貿易の略々半額は英帝國領土内の貿易に屬する。之を除けば吾國は首位を占めて輸出の一二・七%、輸入の一五・四%を占め、絶對額では輸出入は均衡に近い。之に次ぐ北米合衆國は輸出の九・四%、輸入の六・四%を占めるが、絶對的には印度の出超である。反對に獨逸に對しては入超を示し、輸出入ともに八%程度を占めてゐる。以上によつて印度の貿易が如何なる状態にあるかを知ることが出来る。

#### 四、主要貿易品の重要性

日印貿易の相互重要は更に主要貿易品の相互重要についても考へねばならぬ。日印間の主要貿易品は、さきの第二表および第三表に示さるゝ如く、わが輸入品では棉花は約八割五分を占め、輸出品では綿布は約三割を占めてゐる。それ故に茲では輸入棉花と輸出綿布の相互重要につき検討することとする。

第一に、印度棉花に對する吾國の重要性を見るためには、その輸出先各國の比率を比較すればよい。いま最近十年間の印度棉花輸出先を第七表に示す。

第七表によれば印度棉花に對する吾國の重要性は極めて明らかである。即ち吾國は印棉のほゞ五割を輸入するに對し、之につぐ英本國は僅かに一割に過ぎず、その他の諸國もすべて一割以下

第七表 印度棉花輸出先<sup>1)</sup>

	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年
日本	千銀 一八・三二	一二・三五	一六・二〇	一六・四〇	一六・八六	一〇・八〇	一〇・八五	一〇・三三	二〇・一一	一七・五九	
英本國	五七・七	四五・九	四三・三	四〇・二	四二・九	四二・五	五二・五	三七・三	五八・三	五一・八	
獨逸	二七・八七	三九・九	六・四	二七・〇	七・二	七・〇	八・一一	二・四	三・〇	三・四	
白耳義	四・五	二五・六	三・四	三・四	三・〇九	七・八	七・〇	七・四	四・三	二・五	
伊太利	三・〇五	三・三〇	三・八四	三・九三	三・六二	一・八三	一・五〇	九・五	二・七八	一・五三	
中華民國	三・九一	四・一一	四・〇四	五・六六	六・〇六	四・六六	六・五	三・七	四・一	三・二	
佛蘭西	一・二二	一・八五	二・四	二・五	二・三二	三・四	二・四	六・〇	四・二	一・六五	
西班牙	一・六	二・二	二・〇	一・八〇	二・七	一・九	二・五	二・二	一・七	二・〇	
其他	二・五	四・三	三・二	四・五	三・二	三・八	三・七	五・九	四・五	六・二	
合計	三・一八	二・六八	三・七二	四・〇七	三・九三	二・三六	二・三六	二・〇六	二・七〇	二・四六	

に過ぎない。さきに昭和八年印棉不買を斷行して、印度の棉花市場を混亂せしめ得たのは主としてこの事情によるものである。

然らば印度棉花は吾國において如何なる重要性を有するか、いま最近十年間吾國の輸入棉花における印度棉花の比率を示せば第八表の如くである。

第八表 印度棉花の吾國における地位

年次	輸入額			輸入數量		
	英印より輸入價額 <small>千円</small>	輸入總額 <small>千円</small>	輸入總額に對する英印より輸入の%	英印より輸入數量 <small>百斤</small>	輸入總量 <small>百斤</small>	輸入總量に對する英印より輸入の%
一九二六年	三三、五〇	七五、九二	四三・一	五八五・三六	二六四・六三	二二・四
一九二七年	二〇、二八一	六四、六三〇	三・四	四九二・〇五	三九八・五	一二・〇
一九二八年	二五、二六六	五四、九四二	四六・三	四六〇・九六	九七五・一七	四七・二
一九二九年	二二、一〇八	五七、〇一六	四三・三	五一六・四八	一〇九八・七一	四六・六
一九三〇年	一四七、六八八	三六、〇四七	四・八	四七五・四四	九七三・一八	四九・四
一九三一年	一一三、二六二	二九、二七三	三・二	四八八・二五	一一六・八六	四一・一
一九三二年	九一、四六六	四四、七四一	二〇・五	二七九・八四	二七四・一六	二五・
一九三三年	一八、七九六	六四、八四七	二七・九	三九七・二八〇	三三八・二〇	三八
一九三四年	二五、二四四	七三、一四五	三三・五	五七二・三八三	三五四・八三	四一・七
一九三五年	二五、〇三六	七四、二二二	三三・	五三二・〇三九	二二八・七九	四一・四

第八表によりて明らかなる如く、吾國における印度棉花の地位は、最近は價額において三割六

分、數量に於て四割二分を占める。而して恐慌期の減退を別にすれば、この十年間の傾向は、價額においても數量においても減退傾向にある。この點より見て日印協定が一定棉花の輸入を保證するは、印度にとりて極めて有利な條件であると言ふことが出来る。

第九表 綿織物對印輸出の地位<sup>1)</sup>

年	輸 出 價 額			輸 出 數 量		
	英印へ輸出	輸出總額	比率	英印へ輸出	輸出總量	比率
一九二六年	七〇三六 <sup>千円</sup>	四六二五四 <sup>千円</sup>	一六九%	—	—	—
一九二七年	八五七二	三八一七六〇	三三四	—	—	—
一九二八年	七〇一八五	三三二二七	一九九	一四八九八	—	二五二
一九二九年	二〇九一八	四二七〇六	三六四	一七九〇五	—	三三三
一九三〇年	六二二六	二七二二六	三三五	一五七一五	—	二五七
一九三一年	四八六六	一九七二	二五・一	一四三六〇	—	二六・六
一九三二年	八〇六三	二八七三	二七九	四四四二	二〇二七三	三三七
一九三三年	七四三二	三八二二五	八六	六四六五	二〇〇三三	二二六
一九三四年	六八二三	四九三二	三六	四一〇五	二五七二五	一五・九
一九三五年	八五一八〇	四六〇九七	七二	四二〇五	二七五一八	二〇・四

第二に、吾國の對印輸出品を、代表する綿布の地位を見るに、第九表に示さるゝ如く、一時は價額の二割七分、數量の三割一分も占めたこともあるが、最近では絶對的には増加したるに拘らず他の方面への輸出増加のために、相對的には減退して價額の一割七分、數量の二割を占めてゐる。

1) 大藏省、外國貿易月報に據る。

る。何れにせよ英領印度は綿布輸出の重要市場である。従つて日印協定によつてこの市場を確保することは吾國にとつても重要である。然らばこの綿布は印度において如何なる地位を有するかいま印度における綿布輸入先を示せば第十表の如くである。

第十表 印度綿布輸入先

	一九二九 —三〇年	一九三〇 —三一年	一九三一 —三二年	一九三二 —三三年	一九三三 —三四年	一九三四 —三五年	一九三五 —三六年
日本	五六一九六六 千兩 三九・三	三〇・七七	三九・七一	五九・七四	三四九・四二	三七・七三	四九五・四五
英本國	一二四七五元 三六・〇	五三・四四	三八・四九	五九・一九	四二五・八三	五三・三九	四九九・三五
其他	一〇九八四二 五・七	五八・〇八	五二・三四	四八・四六	二〇八・九	一七・五四	二一・三五
合計	一九九六六 100.0	八〇・〇〇 100.0	七五・二三 100.0	一三三・二九 100.0	七五・六三 100.0	九三・七四 100.0	九六・四五 100.0

即ち印度への輸入綿布は殆んど吾國と英本國とが獨占的であり、以前には吾國は三割程度に過ぎず、英本國は優位を占めてゐたが、最近ではほぼ伯仲の程度にある。即ちわが綿布の輸入は印度にとつてもまた重要であることが判る。

今日にあつては輸入市場よりも輸出市場がより重要であるといふ點より見れば、わが綿布にとつての印度市場は二割程度に過ぎないに對し、印度棉花にとつての吾國市場は五割以上を占める



から、印度にとつての吾國はより重要である。併しながら前述の如く印棉は對日輸出の八割五分を占めるに反し、綿布は對印輸出の三割を占めるに過ぎないから、この點より見れば吾國にとつての印度市場はより重要である。

## 五、協定成立後の日印貿易

日印協定の實施されてより既に二ケ年半を経過しつつある。いまこの協定の下に行はれた昭和九年および十年の日印貿易は、之を協定前の貿易および協定の内容と對比して、如何なる状態にあるか、協定の改訂に關聯して検討を要する問題である。

第一に、二ケ年間の棉花輸入状態を見るに、再輸出を控除したる純輸入は、棉花第一年度二、

〇五三、五三五俵、第二年度一、六四一、〇二五俵に達し、基準數量百萬俵は勿論、最大數量百萬五十萬俵をも遙かに凌駕してゐる。協定前の十ケ年平均は約百萬五十萬俵であり、三ケ年平均は約百萬二十萬俵であつたから、是等に比較して著しく増加してゐる。即ち印度は豫想以上に有利な状態となつてゐる。而して百萬五十萬俵を超過する數量即ち第一年度五五三、五三五俵、第二年度一四一、〇二五俵は、次年度に繰越さることとなつてゐる。茲に問題は兩年度の超過數量の合計が、第三年度に繰越すものか、または第二年度の超過數量のみが繰越すものかの點にある。『議定書』の邦文では『……超過數量ハ次期棉花年度ニ對應スル綿布年度ニ對スル綿布ハ割當決定上、右ノ

次期棉花年度ニ於テ印度ヨリ日本國に輸出セラル、棉花數量ニ加ヘラルベシ<sup>2)</sup>』となつてゐる。英文では the excess shall be added to the quantity of raw cotton exported from India to Japan in the following cotton year for the purpose of determining the allotment of cotton piece-goods for the cotton piece-goods year corresponding to such following cotton year. <sup>3)</sup> となつてゐる。研究を要する問題である。

第二に、右の輸入棉花に對して輸出しうる綿布の數量は、まづ基準棉花百萬俵に對して三億二千五百萬碼、これ以上の棉花每一萬俵につき百五十萬碼の計算にて加算すれば、第一年度四億八千二百五十萬碼となるが、最大數量は絶對的に四億碼と協定されてゐるから、極限までの輸出となり、第二年度は同様に計算せば、四億二千百萬碼となるから、これまた極限の四億碼まで輸出しうる筈である。然るに再輸出を含めての現實の輸出數量は、綿布第一年度四六四、八六三千碼、第二年度五二二、四五二千碼に達し、この平均は協定前三ヶ年の平均五億一千萬碼よりも少い。即ち吾國はこの協定後において却つて輸出を減退せしめつゝある。而して右の對印輸出量より印度の再輸出を控除する時は、第一年度四〇六、四六九千碼、第二年度四六〇〇九四千碼の純輸出となつてゐる。

第三に、輸出綿布の品種別割當と現實輸出との關係を見る爲めに第十一表を次に掲げる。いま協定前三ヶ年平均數量を協定後の現實輸出數量と比較する時は、第一年度には生無地・緣

2) 前掲書 p. 5.  
3) 前掲書 p. 12.

第十一表 綿布品種別の對印輸出

品 種	割當率	同割當數量		現實輸出 第一年度	同 上 第二年度	再輸出數量 第一年度	同 上 第二年度	純輸出數量 第一年度	同 上 第二年度	協定 三ヶ年平均
		上	下							
生 無 地	% 四・五	千噸 一八〇,〇〇〇	千噸 一九六,二〇七	千噸 二三四,六八八	千噸 三三,〇二一	千噸 一七五,二七七	千噸 二〇三,六七七	千噸 一九八,一八六		
緣付生地	一・三	五二,〇〇〇	五一,九八〇	六七,六四一	八六九	五一,一九七	六六,七三二	五一,四六一		
晒 (白) 地	八	三三,〇〇〇	六一,七三〇	六四,三八七	二五,六三三	四九,六四七	四九,六四七	一一〇,三六一		
色 物	三・四	三六,〇〇〇	一五四,九五八	一五五,八三七	一九〇,一六	一四,八三七	三三,九四三	一五〇,一五七		
計	一〇〇	四〇〇,〇〇〇	四六四,八六三	五三,三三三	六九,六六六	四〇六,〇九六	四一〇,〇九六	五一〇,〇五五		

付生地・色物には大差なく、たゞ晒地だけは半減してゐる。第二年度は生無地は増大し、緣付生地・色物は大差なく、晒地だけは同様にほゞ半減してゐる。この事實より見る時は、晒地の割當は餘りに過少であつたことが判る。次に協定上の割當數量と再輸出を控除せる純輸出數量とを比較するに、第一年度は生無地・緣付生地・色物において協定以内に止まり、晒地においてのみ規定以上に出てゐる。第二年度では總ての品種において協定數量を超過し、従つて全體において約六千萬碼の超過となつてゐる。要するに品種別割當において最も問題となる點は、晒地の割當數量にある。この數量を増加すべきことは、以上に述ぶるが如く種々の點より見て合理的である。

第四に、日印協定に對する印度側の期待は、英國商品および自國工業の保護を主としたもので

あるが、この目的は果して實現されつゝあるか、前掲第十表に示せる如く印度への綿布輸入の比率は、第一年度には吾國は三九・六％に減退し、英國は五八・五％に増進してゐるから、英國商品の保護目的は達せられた様であるが、併し第二年度には逆轉して吾國五二・四％、英國四六・四％となつてゐるから、茲ではこの目的は達せられてゐない。併しながら今もしこの協定なくして、日英兩國の自由競争に委せられたとせば、吾が商品は恐らく尙ほ著しく進出したであつたらう。この意味では英國商品に對する消極的の保護作用を否定することは出来ない。次に國內工業即ち印度綿布の生産高は、第一年度において著しく増加して約三十四億碼といふ未曾有の數字を示してゐる。即ち國內工業保護の目的は積極的に達成されつゝある。従つてこの協定をそのまゝに繼續することは印度經濟の發展より見て望まじき所である。之に對する吾國側の事情は、兩年度の棉花五億一千一百萬圓の輸入に對し、綿布輸出は僅かに一億五千一百萬圓に過ぎず、二ケ年間に三億六千萬圓の入超である。幸に他の諸商品の輸出によつてこの入超の一部は補填し得たけれども、尙ほ貿易均衡には達してゐない。従つて吾國としては何らかの改訂を加ふることによつて、この協定の繼續を希望すべき立場にある。協定改訂の問題は之を次の機會にゆづり、茲ではたゞ現實の事實の檢討に止める。(二一・七・一五)